

して、十月の和名が訓せられて居ることは、不思議ではない。太歳とは木星の神靈の異稱であつて、又、太陰とも云ふ架空の星のことであるが、文那では此の太歳、云ひ換へれば、木星の所在によつて歳次を示したのであつて、日本書紀には天皇の御代御代の始めに此の太歳なる文字が記載せられてある。易緯乾鑿度なる書には『常に太歳を以て歳を紀す』と載つて居る。

序でに、十二月の和名を載せて、其の語源を研究することゝし度い。之、又四季の和名と同様、異説多く、一致しないが、本居宣長は古事記傳に於て『凡て月々の名ども、昔より説どもあれど、皆わろし。其中にたゞ三月を彌生なりと云るのみはよし。』又、『此外にも、己も考出て、さもあらむと思ふ彼此はあれど、十二月みながらは、未だ考得ざれば、今云ず、なほよく考へて云べし』と書いて居る。

たゞ、考ふべきは、我國は、上代より農耕を本としたから、月々の名稱は農事に依つて呼ばれたと解することが至當ではあるが、之が解釋については、可成り附會せられたものがある様である。

次に、諸説を一覽表に作成して、比較に便ならしめることゝした。

終りに、筆者の十二月和名についての解釋を概説することゝしよう。

一月(むつき)は、從來陸む又は親む月の意味に解せられたが、月の和名が農事を元として成つた事に着眼すれば、適當なものでなかつたことが判る。谷川士清も生月と充てゝ居るが、之れは前の年から藏つてあつた種子が一陽來復して芽を生むと云ふ意に解釋することがよいであらう。

二月(きさらぎ)は、陽氣が更にやつて來て、芽を大きくさせ、三月(やよひ)には彌々生ひ繁る。四月(うづき)は植える。五月(さつき)は早苗を田に植える月、六月(みなつき)は水が大切な月、七月(ふみつき)には稻が穂を持つて來る。八月(はつき)に成ると、稻の穂が張出して來る。九月(なかつき)は稻を刈る月である。十月(かみなつき)には收穫を神に供饌する。十一月(しもつき)に爲れば、霜が降りるので、來年の農耕の用意にかゝる。十二月(しはす)には、既に來年の準備も完了して、正月を迎へるのを待つ。大體以上の如き解釋となるのである。(皇紀2600年6月31日朝)

上海で夏季時刻採用

〔同盟上海五月29日發〕 共同租界工部局では、日光節約案として、夏の間、工部局各局部の時計の針を1時間づつ進める事になり、フランス租界工部局および上海特別市政府にも諮つたが、いづれも異議なく賛成したので、五月29日の參事會で正式決定、近く一せいに實施することとなつた。